

岡本隆司『近代日本の中国観 石橋湛山・内藤湖南から
谷川道雄まで』講談社選書メチエ、2018 年

水羽信男

著者の岡本隆司は 1965 年生まれ、京都大学大学院で東洋史学を学んだ。徹底した精緻な実証を旨とし、1945 年の敗戦前の軍国主義にも与しない、「自立的」で「超然」的な学問だと著者が総括する京都学派の知的伝統＝「^{ぼく}樸学」に連なる（176-8 頁、以下、括弧内の数字は本書のページ数）。2021 年 2 月 8 日の段階で、国立情報学研究所の Cinii Books で検索すると著者の 56 冊の作品がヒットする。共著、編集、監修の書物や、海外で出版された翻訳書を含むが、それらを除く単著だけでも 23 冊に上る¹。特にここ 5 年間では 12 冊、一年に 2 冊以上のハイペースでの出版である。受け入れ機関も多数で、有力商業出版社からの刊行も多い。また 2000 年の大平正芳記念賞や、2005 年のサントリー学芸賞をはじめとして、輝かしい受賞歴を誇る。

その意味で、著者の中国についての議論は、日本の読書界に相応の影響を持ち、また日本の読書人によって受け入れられている。著者の数多い作品のなかでも本書を特に取り上げるのは、本書が著者の中国史に対する理解そのものではなく、近代日本人の中国認識を祖上にのせ、議論を行っている点にかかわっている。本書をとりあげることで、現在の日本の読書界の中国認識の方法上の特徴のひとつが理解できるのではなかろうか。

本書の構成は次のとおり。はじめに／石橋湛山：小日本主義と中国社会／矢野仁一：王道政治と中国社会／内藤湖南：「近世」論と中国社会／橘樸：「ギルド」と中国社会／時代区分論争／むすび：日本人のまなざし。一見して分かるように、本書が取り上げる人物は、著者の独特の基準から選ばれ、自在に論じられている。

まず 1920 年代から日本の植民地拡大政策を批判し（「小日本主義」）、中国などとの友好を模索した石橋を取り上げつつ、彼の中国認識は現実から離れ、「同情」やリベラリストとしてのあるべき理念から論じたものだとして批判する。つまり著者は石橋を日本のリベラル派の中国論の失敗の典型と位置付ける。

その石橋と比較する形で、中国の歴史的個性を追求したと著者がみなす、矢野と内藤の二人の東洋史学者をとりあげ、在野の橘樸の同時代分析に議論を広げてゆく。さらに戦時中の中国社会の調査や、10世紀前後の中国の「変化」をどう評価するかをめぐる、敗戦以後の時代区分論争に話を転じ、最後に3世紀から6世紀までの中国を中心とする、谷川の学説の可能性と限界に議論を収斂する。

本書が一貫して論じたのは、内藤や橘らが中国社会の構造をどう理解したか、という点であった。そのうえで著者は、20世紀前半から今日に至るまで、何人かの例外はあり、個々の議論のなかに見るべき論点が内包されていたとはいえ、日本人の中国論の宿痾は、学問的な方法と現実の乖離という事実だと指弾する。そのうえで「友好」「反日」「嫌中」というレッテル貼りを越えて、「中国とその社会、そのしくみと動きを、[西洋由来の] 借り物の思想・概念で断ずるのではなく、自分の目でじっくり、しっかりみつめてゆくこと。……まずはただ、それだけに取り組み、それだけを成し遂げる」ことの必要性を説く（211）。

この点において、本書では特段の言及はないが、ポール・コーエン（佐藤慎一訳）の『知の帝国主義』（平凡社、1988年）における China Centered の議論とも共鳴しており、評者も同意する。その他、本書から学ぶべき点については、佐藤太久磨の書評が詳しい（『洛北史学』22、2020年）。また谷川道雄に対する著者の理解がもつ問題点については、山田伸吾「批評と紹介 内藤湖南と谷川道雄：岡本隆司『近代日本の中国観』の問題提起を踏まえて」がある（『名古屋大学東洋史研究報告』43、2019年）。さらに本書の持つ全体的な問題点を理解するうえでは、岸本美緒の書評が有益である（『中国研究月報』73(6)、2019年）²。そこで本書に即した本格的な評論は上記に譲り、従来の書評の常識でいえば、「無い物ねだり」「つまみ食い」の類だが、2点に絞って本書への感想を述べておく。

ひとつは20世紀の日本知識人の中国論を検討するうえで、本書のとりあげた個人やグループが最適であったのかという点である。この点については著者も疑問が出るのは承知のうえで、1945年の敗戦前については、当時の日本の論壇で「説得力があつて、輿論を指導、代表していた」知識人を中心

に論じたということかも知れない(33)。著者にとっては、「言説が影響力」を持ち得るか否かが重要であるようだ(32)。だが誰が「輿論」を作るのだろうか。著者は 1920 年代の中国に関連して、自国の歴史と現状をわきまえない「新人」＝青年知識人が、米国に「指喉、扇動」されて排日運動を展開しているという、内藤の論評を特段の分析なく紹介している(106)。当時の中国では外国に操られた愚かな人々が輿論＝ナショナリズムを体現するが、日本では学問的な質が「影響力」を左右したのだろうか。また本書では中国に期待をかけ、それが裏切られたと感じたとき、日本軍による中国変革に夢を託した知識人が登場する。だが、なぜ中国への失望が日本の中国侵略の肯定と結びつくのか、評者には理解できない。本書に学びつつ考えるべき今後の課題であろう。

本書でとりあげられた敗戦後の知識人は、著者が 20 世紀中国とそれ以前の「中国社会」の「連続」に関心があったことから選択されたのだろうと思われる。というのも現状分析に関心をもち社会調査を行った研究者の不十分さが指摘される一方、今日まで続く著者が考える「中国社会」の本質を論じた、数百年あるいはそれ以上前の中国を研究対象とした東洋史学者が注目されているからである。だが評者は、20 世紀の中国社会とそれ以前との「不連続」を問うという視角も必要だと考えている³。特にこの「不連続」性については、1930 年代半ば以降の日中の学術界の知的交流の成果と課題を含めて、いま一度検討すべきであろう。評者が改めて言うまでもなく、はるか昔からの「連続」性を強調する知識人だけが、日本の中国研究を代表するわけではないからである。ただし、この課題も本書の成果を踏まえて議論すべきことは当然である。

二点目は紙幅の関係もありごく簡潔に、著者によって西洋のギルド社会論をそのまま中国に適応し、「旧態依然」と批判された今堀誠二について触れる(146)。評者には膨大な今堀の東洋史学の成果について論じる能力はなく、著者の議論に全面的に反論する準備もない。しかし今堀は『北平市民の自治構成』(文求堂、1947 年)で、戦前の自身の調査に基づき中国社会が西洋社会や日本社会と異質であることを指摘し、中国社会に固有の個性を論じている。たとえば中華民国時代(1912-1949)の北京(北平)の民間の消防隊が、なぜ近代的な公的消防隊とともに共存しているのかを問い、日本人には一見

不可解にみえる中国社会のもつ独自の合理性について論じているのである（今堀書：149頁）。20世紀前半の中国研究者から我々が学ぶべき点は、著者がいう以上に残っているように感じているが、いかがであろうか。

注

- ¹ 本書を除く22冊は以下の通り。『教養としての「中国史」の読み方』PHPエディターズ・グループ、2020年、『「中国」の形成：現代への展望』岩波新書、2020年、『東アジアの論理：日中韓の歴史から読み解く』中公新書、2020年、『君主号の世界史』新潮新書、2019年、『世界史とつなげて学ぶ中国全史』東洋経済新報社、2019年、『中国「反日」の源流』（増補版）ちくま学芸文庫、2019年、『腐敗と格差の中国史』NHK出版新書、2019年、『歴史で読む中国の不可解』日経プレミアシリーズ、2018年、『世界史序説：アジア史から一望する』ちくま新書、2018年、『清朝の興亡と中華のゆくえ：朝鮮出兵から日露戦争へ』（叢書東アジアの近現代史・第1巻）講談社、2017年、『中国の誕生：東アジアの近代外交と国家形成』名古屋大学出版会、2017年、『中国の論理：歴史から解き明かす』中公新書、2016年、『日中関係史：「政冷経熱」の千五百年』PHP新書、2015年、『袁世凱：現代中国の出発』岩波新書、2015年、『近代中国史』ちくま新書、2013年、『ラザフォード・オルコック：東アジアと大英帝』ウェッジ選書、2012年、『李鴻章：東アジアの近代』岩波新書、2011年、『中国「反日」の源流』講談社選書メチエ、2011年、『世界のなかの日清韓関係史：交隣と属国、自主と独立』講談社選書メチエ、2008年、『馬建忠の中国近代』京都大学学術出版会、2007年、『属国と自主のあいだ：近代清韓関係と東アジアの命運』名古屋大学出版会、2004年、『近代中国と海関』名古屋大学出版会、1999年。
- ² この点については、岡本隆司「岸本美緒氏の書評に答えて」『中国研究月報』73(8)、2019年がある。
- ³ 中村元哉がコーディネイトして『東亜』に連載された「日本の現代中国観を再構築する：「中華」の現在とは？」（610～615号、2018年）なども参照されたい。ちなみに中村以外の執筆者は深町英夫、久保茉莉子、関智英、山本真、川島真である。